

園梅の景——梅花宴歌と梅花落——

東 茂 美

『万葉集』巻五の「梅花の歌三十二首并せて序」の序文は、次のように綴られている。

天平二年正月十三日に、帥老の宅に萃まりて、宴会を申ぶ。時に、初春の令月にして、気淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。加以、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛け、蓋を傾く、夕の岫に霧結び、鳥は穀に封ぢられて林に迷ふ。庭に新蝶舞ひ、空に故雁帰る。ここに天を蓋にし地を坐にし、膝を促け觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。もし翰苑にあらざば、何を以てか情を摠べむ。詩に落梅の篇を紀す、古と今と夫れ何か異ならむ。宜しく園の梅を賦して、聊かに短詠を成すべし。

いうまでもないことであろうが、右の序文の表現する志向性からみても、梅花宴の歌のそれぞれが、多かれ少なかれ中国風の装いでたちあらわれてくることは自明のことかもしれない。古に「落梅の

篇を紀」したのにならい「短詠を成す」ことが、宴席に集う貴族官人たちのひとりひとりに求められたはずだからである。かかる「落梅の篇」に注目すれば、これが具体的に何を差し示すか異論のあるところでもあるが、⁽¹⁾ 広く六朝の「梅花落」などを典拠としたものとみるのが至当であろう。序文の作者の掌中には、「梅花」にかかわる詩賦の作品、わけでも「梅花落」の作品が数多く存在していたものと考えられる。もとよりそれは序文を享受し鑑賞し、それに則ることと歌をなしていく側にも、同時的にいえなければならぬ。序文の作者がなんら具体的な説明も添付せずに、いきなり「詩紀落梅之篇」「古今夫何異矣、宜賦園梅聊成短詠」と記しうるのは、その企画しようとするところが、参会した貴族官人たちにとって既に周知のことであるという前提にたつて、はじめて可能であるからである。さらにいえば、かれら宴に列席した貴族官人たちは、序文の「紀落梅之篇」によって促され、掌中の「梅花」にかかわる作品の知識を積極的に「表現」として歌に取り込むことで、席上に「梅花落」の言語空間を形象化していこうとしたのではないかと考えられる。すなわち、共有する知識として存する海彼の作品を、いかに

歌によって形象化し、またその造られた漢風の言語空間のうちに遊ぶかが、旅人私邸に集う貴族官人たちのもっぱら関心を寄せるところではなかっただろうか。そうであれば、かれらが「短詠」によって形象化し遊宴の具としようとした文芸の世界とは如何なるものであるか、その園梅の「景」の幾つかを明らかにしようとするのが、小稿のねらいとするところである。

二

823 梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ

大監伴氏百代

作者である大伴百代は、梅の花が散るのは何処の園であろうかといぶかる。なぜならば、城の山には雪が降っているからだといふのである。落梅の景に対する懐疑の態を、大野山の雪景に転ずることであらうとする。百代の歌が旅人私邸で催された宴で披露された歌であることからみても、「散らくはいづく」という疑問が、その実、春が浅く未だに雪の降りしくなか、既に咲きほこり頻りに花卉を散らす眼前の風景の見事さに、賞讃をこめてうたわれたものであることは確かであろう。

かかる宴では、百代より先に旅人が

822 我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

主人

とうたっており、また百代よりあとには田氏真上が

839 春の野に霧立ち渡り降り雪と人の見るまで梅の花散る

筑前目田氏真上

とうたいもするから、実景として雪景がのぞまれたのかもしれない

い。

ところで百代の歌にみる「城の山」だが、いわゆる大野山であるという説が一般である。かかる「城の山」が、都を離れ遠く大宰の地に下ってきた律令官人たちが日常ふり仰ぐなじみ深い山であったことはいうまでもない。そうでなければ、憶良の「日本挽歌」において「大野山霧立ち渡る」(799)とよまれることもなかったであろう。

しかしながら、百代が「城の山に雪は降りつつ」と、敢えて落梅の景と「城の山」の雪景とを対置してうたおうとした趣好は、ただたんなる降雪の「城の山」に視点を転じたこととなった、実景の描写であったとは思われない。遠山の雪景と落梅の景との間に、構成的な風趣が込められてこそ、遠山の降雪を園梅の宴に持ち込んでくる面白があったに他ならないからである。かかる「城の山」の遠山の景と落梅の景とを対置させてうたう百代歌のありかたによって、すぐさま想起されてくるのは、次のような「梅花落」の作品である。

梅嶺花初発 天山雪未開 処処疑花満 花辺似雪回 因風入舞袖
襍粉向牀台 匈奴幾万里 春至不知来

(盧照隣「梅花落」)

胡地少春来 三年驚落梅 偏疑粉蝶散 乍似雪花開 可憐香氣歇
可惜風相摧 金鏡且莫韻 玉笛幸徘徊

(江総「梅花落」)

盧照隣は王勃・楊炯・駱賓王と名声を齊しくし、世に王楊盧駱あるいは初唐の四傑と称せられるほどの文才の主であるが、盧のうたう「天山」とは、新疆省疏勒県の西北、葱嶺の烏赤別里山から起り、

一に西北に走り一に東北に走る一名「折羅漫山」と称する連山のこ
とであろう。虚はかかる「天山」が雪をいたたくさまをうたい、そ
れが梅花の景にも見まがうものであると詠嘆する。そして、その遠
景をふまえながら、対置された園梅が風のまにまに舞うさまをうた
うのである。百代の歌は、ここにみる「天山」の雪景と園梅の景と
の対置構成を襲うかたちでつくられたものではなかっただろうか。

もとよりそれは模倣というだけのもではあるまい。夙に太田青
丘氏は、江総の「梅花落」にみる落梅と雪のまがう情景が、旅人の
歌に影響を与えたひとつであることを指摘されている。⁽³⁾ここでは同
じ江総の「梅花落」にいう「胡地」に注目したい。「胡地」が具体
的に何処を表わすものかは詳らかではない。江総は陳に生まれ、梁
の太子中舍人、陳の僕射尚書令、さらに隋に入ってから上開府に
拜せられている。後廷に遊宴して創作を専らとしたというから、文
辭に巧みな人物であったのだろう。「胡地」を文飾として解すれ
ば、何処であるかという素性を問うこともないかもしれない。が、
ただ江総のうたう園梅の景が辺陲の地に見るそれをうたったもので
あることを看過するべきではない。

旅人は、「大宰帥大伴卿、冬の日に雪を見て、京を憶ふ歌一首」
をものしている。

1639 沫雪のほどもほどもに降り敷けば奈良の都し思ほゆるかも

冬の某日降りしきる雪のなから、遙かな都を思い起している。
旅人にとって雪景に都の記憶が絡み合いながら重想されているので
ある。とすれば、園梅の歌においても、おなじく遙か帝都の西方
「胡地」にあつてうたう江総の「梅花落」が、親しく旅人の脳裏に
占められていたとしてもなんら不都合はあるまい。

同様に、百代の歌にその享受をみた虚の「梅花落」も「匈奴幾万
里」、まさに辺陲の地でうたわれたものである。旅人の歌から百代
の歌への流れは、たんなる歌中のことばの受け継ぎ、付け合いによ
るものではなく、詠歌の背後には、共有する文芸の世界が想定され
ていたとみるべきである。すなわち、「梅花落」の世界がそれであ
る。結論ふうにいえば、彼らにとってそれは断章として「表現」を
摸すためだけに存在していたのではなく、梅花宴そのものを支える
文芸的な言語空間を創造する、ひとつの世界として形象化されてい
たものと考えられるのである。

三

無論、「梅花落」は旅人と百代との間だけにのみ共有されていた
のではあるまい。なぜならば、宴席の成員全体が歌のそれぞれを
「梅花落」の作品に擬定し解してこそ、はるかに宴は酣となったは
ずであるからである。

さて、宴席の歌には、次のような歌群を拾うことができる。

816 梅の花今咲けるごと散り過ぎず我が家の園にありこせぬかも

少弐小野大夫

818 春去ればまづ咲く宿の梅の花一人見つつや春日暮らさむ

筑前守山上大夫

822 我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れくるかも

主人

824 梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林に鶯鳴くも

少監阿氏奥島

826 うちなびく春の柳と我が宿の梅の花とをいかに別かむ

大典史氏大原

837 春の野に鳴くや鶯なつけむと我が家の園に梅が花咲く

平師志氏大道

841 鶯の音聞くなへに梅の花我ぎ家の園に咲きて散る見ゆ

対馬目高氏老

842 我が宿の梅の下枝に遊びつつ鶯鳴くも散らまく惜しみ

薩摩目高氏海人

右の歌のうちから「主人」と記された旅人歌(822)をとりあえずおくにしても、「我が園(宿・家)」の表現を〈実態〉としてうたわれているものと解すれば、どの歌も旅人私邸の園梅を背視して、自分のやかたの園梅をうたっていることになる。宴席の歌としてはなほだ不都合であることになりかねない。この点については、諸注、諸説さまざまに論じているところであるが、たとえば高木市之助氏のいわれる「自分の家や庭で詠んだ作をここへ間に合わせたと見られなくもない」という説⁽⁴⁾、あるいは原田貞義氏が用字法から推される予作説⁽⁵⁾、また吉永登氏の、一部の歌が旅人邸での接待役側の人物群のものであるとして、旅人の側にたつてうたったために「我が宿」等の表現をとったという説⁽⁶⁾などがあって注目される。だが、はたしてかかる歌群を〈実態〉にのみ解体することによって、問題のすべてが氷解するであろうか。むしろ〈実態〉のレベルで旅人邸あるいは官人私邸であると判別することから一旦離れて、〈表現〉上の問題として捉えなおす必要があるのではないだろうか。

右の歌のいずれもが、まず「梅花」にかかわる海彼の作品の〈表現〉から逸するものではないことに注視されるであろう。たとえば奥島や老の歌にみる「梅花」と「鶯」との構成も「梅花落」のなか

に容易に見出すことができる。江総はその作品「梅花落」において、次のようにうたっている。

臘月正月早鶯春 衆花未発梅花新 可憐芬芳臨玉台 朝攀晚折
還復開 長安少年多輕薄 両両共唱梅花落 満酌金卮催玉柱
落梅樹下宜歌舞 金谷万株連綺薨 梅花密處藏嬌鶯 桃李佳人
欲相照 摘藥牽花来並笑 楊柳条青楼上輕 梅花色白雪中明
横笛短簫悽復切 誰知柏梁声不絶

ここに「梅花密處藏嬌鶯」をみる。また同作品には大原の歌にみえる「柳」と「梅」との構成も「楊柳条青楼上輕 梅花色白雪中明」とうたわれており、さらにまた海人の歌あるいは海人の歌より先に載せられている若麻呂の歌(827)にみる「梅の下枝に(梅が下枝に)」という特色ある表現も、実はそのまま簡文帝の「雪裏覓梅花詩」に見ることができるのである。

絶訝梅花晚 争来雪裏窺 下枝低。可。見。高。处。遠。難。知 俱。羞。借。腕
露 相讓到腰羸 定須還翦綵 学作兩三枝

「梅花」と「鶯」、「柳」と「梅花」という構成は、右の江総の作品に限ったことではなく他にも見ることができ、いまは割愛に委ねる。山上大夫がうたう「まづ咲く」の発想も「衆花未発梅花新」とあり、他にも例を引くならば、庚信「梅花」に「常年臘月半、已覺梅花闌」、何遜「詠早梅詩」に「宛園標物序鶯時最是梅」、陰鏗「雪裏梅花」に「春近寒雖轉、梅舒雪尚飄」など挙げるにいとまない。

以上のことからみて、右にあげた梅花宴の歌群は、旅人邸の園梅を媒材としつつも、うたうところは「梅花落」等に擬定した園梅の〈一景〉であったのではないか。すなわち、「我が」云々とは作者

と直接かわるへ実態」ではなく、漢風世界の「景」なのではないかと思われるのである。「梅花落」の形象化による「表現」であるならば、宴席においてなららぬ齟齬をきたす「表現」でもなかつたはずである。

叙上のごとくに見做すことができるならば、従来さまざまに論じられてきた山上大夫の歌も、異なる視点から論ずることが可能となるだろうが、これについては後述することとして、同宴席歌からまた別の歌を拾うこととする。

四

宴席において貴族官人たちは、必ずしも「梅花」を「実景」としての草木の立場だけにとどめて詠んでいるわけではない。当時の都の宴が流行の神仙思潮を享けていたことはいままでもないが、梅花宴においても

819世の中は恋繁しゑやくしあらば梅の花にも成らまじものを

豊後守大伴大夫

831春なれば宜も咲きたる梅の花君を思ふと夜眠も寝なくに

彦岐守板氏安麻呂

(852) 梅の花夢に語らく風流たる花とも我思ふ酒に浮かべこそ「一に云はく、いたづらに我を散らすな酒に浮かべこそ」⁽⁷⁾

といった歌を見ることが出来る。「恋繁しゑやく」は詠嘆の助字であり、「成らまじものを」は、たとえば大津皇子歌(107)にこたえた石川郎女の「我を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らまじものを」(108)に見られるように、常套の恋情表現であったと考えられる。後追和の歌(851)は安麻呂歌と一連の性格をもつ歌だ

が、夢の裡に梅花が語りかけてくるという趣好である。かかる歌については、小島氏が粉本として艶本『遊仙窟』に窺える神仙を暗示するとされている。⁽⁸⁾ また「酒に浮かべこそ」について契沖は同『遊仙窟』の一章を挙げ、さらにこれについても小島氏が

玉腕承花落 花落腕中芳 酒浮花不没 花含酒更香

(明帝「詠梅花」)

竹葉裁衣帶 梅花奠酒盤

(徐陵「春情」)

などに出典を求められている。⁽¹⁰⁾ この歌に中国文芸の投影があることは疑い得まい。

梅花の擬人化(わけても婦女化)は、「梧桐日本琴一面」の漢文序ならびに歌が、『遊仙窟』『高唐賦』『洛神賦』などの影響のもとになったのと同じの構想をとってうたわれたものと考えられる。当該歌群もこれらの作品に模して神女を夢想するというかたちでうたわれたのであろうが、なにより「梅花」の形態が婦女化するに相応しいものとして海彼の作品に存在していたことに留意するべきである。⁽¹¹⁾

鮑照「梅花落」を挙げてみよう。

中庭雜樹多 偏為梅杏嗟 問君何独然 念其霜中能作花 露中

能作実 揺蕩春風媚春日 念爾零落逐寒風 従有霜華無霜質

鮑照の感慨の根底には、「何独然」という「梅花」への心情がこめられている。春風に揺蕩せられても、庭の雑々の灌木にまぎれることなく、ひととして開花したそれへのいとおしみがある。決して剛気ではなく、むしろたおやかで儂な気ですらあるから、別に鮑泉に「可憐階下梅 飄蕩逐風廻」(「詠梅花」、吳均に「終冬十二月、寒風西北吹、独有梅花落 飄蕩不依枝」(「梅花落」)ともうたわれ、嚴

寒のなか依るべなく散りゆく花が惜しまれるのである。先掲の歌群もかかる作風によったものであろう。

「梅花」の孤景のさまから、「梅花」の婦女化がなされ、さらにいえば、それから閨怨の風物であるといった想定がなされるのも、また自然である。簡文帝の作品他を挙げる。

……挂靡靡之遊糸 雜霏霏之晨霧 争楼上之落粉 奪機中之織

素(中略)憐早花之驚節 訝春光之遺寒 顧影丹墀 弄此嬌女

春風吹梅畏落尽 賤妾為此斂蛾眉 花色持相比 恒愁恐失時

(簡文帝「梅花賦」)

対戸一株梅 新花落故栽 燕拾還蓮井 風吹上鏡台 娼家怨思

妾 楼上独徘徊 啼看竹葉鏡 簪罷未能裁 (徐陵「梅花落」)

隄外一枝梅 寒花五出開 影随朝日遠 香逐便風来 泣对銅鈎

障 愁看玉鏡台 行人断消息 春恨幾徘徊 (楊炯「梅花落」)

新歲芳梅樹 繁苞四面同 春風吹漸落 一夜幾枝空 小婦今如

此 長城恥不窮 莫將遼海雪 (劉方平「梅花落」)

うたわれるのは、春恨を抱きながら窓外の梅樹を眺め、楼台をまた園庭を逍遙する閨怨に焦れる婦女の姿である。徐陵は娼家すなわち妓楼のうた姫の艶怨をうたい、楊炯はすでに旅途からの便りも絶えた婦女の歎きを、劉方平は辺塞の地に夫を遣ってしまった若き妻の歎きをうたっている。もとより作者はかかる境涯に措定したにすぎず、自らの歎きの真情を吐露したものではない。

叙上のような発想をとるものとして梅花宴歌に拾うとすれば、次のような歌が挙げられよう。

818 春去ればまづ咲く宿の梅の花一人見つつや春日暮さむ

筑前守山上大夫

(850) 雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがも

(851) 我が宿に盛りに咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もがも

山上大夫の歌の「表現」については先にも述べたが、高木氏のいわれる「反発」論以降さまざま論が交されてきている。注目すべき論として、伊藤博氏は、憶良の歌は妻を亡なった旅人の孤独感を充分に理解し「旅人の心境に立って、思う人の歌」を詠じた歌であり、さらに大伴大夫が継いで「思う人と見られぬ孤と理解し」「世間は恋繁しゑや」とうたい「恋心の叙述を受け」とっていることからしても、深淺の差はあっても「憶良の何げない意図が、一座の共通の理解となった」と述べられている。⁽¹²⁾ 憶良歌の基調に旅人―亡妻大伴郎女という「実態」を介在させることで、「一人見つつや春日暮さむ」という「集宴の雰囲気に和まぬもの」の真意を明らかにしていこうとされるのである。精細な氏のかかる解釈に組しないとすれば、充分に慎重であらねばならぬのだが、ここでは「実態」として文雅の宴を問うのではなく、以上に述べてきた漢風世界の「景」として、憶良歌も解することができないか、と考えるのである。すなわち、憶良歌にみる「宿」がそうであったように、「一人見つつや春日暮さむ」もまた、存外に簡文帝・徐陵・劉方平らのもった立場と同様に、園梅の景を愛でつつ春日を過ごす閨怨婦にかりてうたってみた、そういう宴の歌であったのではあるまいか。ゆえに大伴大夫の歌に見る恋情の表現も、それに呼応するかたちでたちあらわれるのである。

そしてまた、旅人の歌とみなされている後追和歌の「見む人もがも」の発想も、亡妻を偲ぶ心情が露呈したものではなく、思う人がそばに居ないという立場にたち、漢風の「景」をうたとして形象化

してみたものではあるまいか。

陸凱の作品に「贈范蔚宗詩」を見る。

折花逢駅使 寄与隴頭人 江南無所有 聊贈一枝春

これには「陸凱与范蔚宗交善自江南折梅花一枝詣江与蔚宗兼贈詩曰」という「荊州記」の記事がある。江南の陸凱が隴山にあった范県に跨がる山で、隴頭水はそのほとりであるから、范ははるか西域に赴いていたことになる。鄙の地にある旅人と江南の地にある陸凱とは立場を異にするが、遠路の彼方の人を思いやるといふ点では同発想をとっている。「見む人もがも」とは、あえて、〈実態〉に引きつけて解するとすれば、存外「員外故郷を思ふ歌兩首」に連鎖して、都にある某人にことよせた歌とみることもできる。⁽¹³⁾

五

海彼の作品を襲い、さまざまな園梅の〈景〉がうたわれる。そのたびごとに、なじみ深い詩賦も披露されたかもしれない。そういう園梅の〈景〉を和歌によって形象化し共有することによって、はじめて冥は漢風の薫り高いものとなったはずである。かさねていえば、「梅花」の詩賦群に擬定し、しかもそれを漢詩ではなくあえて和歌によって試み、その言語空間に遊ぶ、それこそがまさに海彼の門戸大宰府に相応しい梅花宴のへはいからであったのである。

〈注〉

(1) 「落梅の篇」がなにを差し示すかについて、また「詩」とするか「請」とみるかについて、倉野憲司氏と小島憲之氏との間で論が交わされている(倉野氏「万葉集卷五梅花歌序の『詩紀落梅之篇』について」国語と国文学第36巻第1号。小島氏「懐風藻より天平万葉の詩序へ」国語国文

第27巻第10号・『落梅之篇』私見」国語と国文学第36巻第6号)。その後、古沢未知男氏が両説を紹介し詳論されている「万葉『詩紀落梅之篇』統紹」国語と国文学第38巻5号)。倉野氏のいわれる謝朓の「落梅」一篇は「玉台新詠」でも「雜詩五詠」のうちの一首でしかなく、この作品のみに「落梅之篇」の対象を絞ることは無理であろう。古沢氏の論じられるところに従いたい。

(2) 「梅花」と「雪」との構成は、次第に表現の一様式となっていく。当該宴席歌の他にも

- 卷八 1426 1436 1445 1640 1642 1647 1648 1651 1660
- 卷十 1833 1834 1840 1842 1862 2329 2344
- 卷十七 3906
- 卷十八 4134
- 卷十九 4282 4287

などを例として拾うことができる。かかる表現様式のもっとも始発となる作品を海彼に求めるならば、本文引用例文を含めて次のように作品のうちに見ることができる。

- ・常年臘月半 已覚梅花開 不信今春晚 俱来雪裏看 (庾信「梅花」)
- ・絶訝梅花晚 争来雪裏窺 (簡文帝「雪裏覓梅花詩」)
- ・苑園標物序 驚時最是梅 銜霜当路發 映雪擬寒開 (何遜「詠早梅詩」)
- ・春近寒雖轉 梅舒雪尚飄 (陰鏗「雪裏梅花」)
- ・胡地少春来 三年驚落梅 偏疑粉蝶散 乍似雪花開 (江総「梅花落」)
- ・梅花特早 偏能香識 或承而發金 乍雜雪而被銀 (簡文帝「梅花賦」)
- ・水泉猶未動 庭樹已先知 翻光同雪舞 (王筠「和孔中丘雪裏梅花詩」)
- ・曉梅朝始發 庭雪晚初消 (庾肩吾「同蕭左丞詠摘梅花詩」)
- ・独有梅花落 飄蕩不依枝 流連逐霜彩 散漫下水澌 (吳均「梅花落」)
- ・中庭一樹梅 寒多葉未開 祇言花是雪 不悟有香来 (蘇子卿「梅花落」)
- ・芳樹映雪野 發早覺寒侵 (張正見「梅花落」)
- ・梅嶺花初發 天山雪未開 処処疑花滿 花辺似雪回 (盧照隣「梅花落」)
- ・鐵騎幾時回 金闈怨早梅 雪中花已落 風暖葉應開 (沈佺期「梅花

落)

- ・大庚敏寒光 南枝独早芳 雪含朝暝色 風引来去香 (李嶠「梅」)
- ・更憐花带弱 不受歲寒移 朝雪那相妒 (張九齡「庭梅詠」)
- (3) 太田青丘氏『日本歌学与中国詩学』102頁以下。中西進氏『万葉集の比較文学的研究』(上)「六朝風—旅人と憶良」参照
- (4) 高木市之助氏「二つの生」『吉野の鮎』のちに『高木市之助全集』第一巻「吉野の鮎・国見夜」37頁以下
- (5) 原田貞義氏「梅花歌三十二首の成立事情」万葉第57号
- (6) 吉永登氏「梅花の歌三十二首に見える『我』について」万葉第66号のちに『万葉—通説を疑う—』153頁以下。
- (7) 「後に追和する梅の歌四首」(848~852)の一首であるが、「梅花の歌三十二首」と一連の性格を負っているはずであろうから、ともに取上げて考察する。
- (8) 小島憲之氏「万葉集と中国文学との交流」『上代日本文学与中国文学』93頁以下。
- (9) 「万葉代匠記」巻五『契沖全集』第三巻81頁。『遊仙窟』に「極目芳苑に遊び、相将りて花林に對す、霧淨れて山光出で、池鮮かにして樹影沈む。落花時に酒を浮べ、歌鳥鳴琴を惑はず」とある。
- (10) 小島氏 注(8)に同じ

(11) たとえば、「梅花」の擬人化としては、唐の曹鄴の作あるいは無名者の作として「梅妃伝」が書かれている(『説郛』第三十八巻、『龍威秘書』第二十八巻など)。江采蘋という美女が宮中に入って玄宗の寵愛をうけたが楊貴妃の出現で寵をうしなう。その後安祿山の変の混乱の中で行方が知れなくなる。のちに玄宗は梅樹の下に埋もれた妃を夢にみて偲ぶというもの。

(12) 伊藤博氏「園梅の賦」『万葉集の歌人と作品』(下)103頁以下。氏は、同時に憶良の歌を「梅本来の風姿にも似た孤峭の歌」と評した高木氏の説(注(4)と同書)も基本的には正しいとして、憶良が「旅人心」に立ってうたったことと重層的に、根底的に憶良その人の内心の投影があり、憶良のもつ人間的孤独感の存在があることを指摘されている。近年では大久保広行氏が「わが園に梅の花散る—発想の重層性をめぐって—」(国文学論考第10号)で同視点から論じられている。

(13) このあたりについては、本会月例会において口頭報告(八一年六月例会)の席上、辰巳正明氏より示唆をえた。別に、氏は梅花宴が「都の文雅に匹敵する、あるいは都の文雅に模して開いた、官人集団の望京歌群であり」「一様に京師を偲びながら詠まれ」たものであると論じられている(『依興歌論』東洋研究第62 63 64号合併号)。

8号(昭和四十三年十二月二十日発行)

神武紀と物部伝承

万葉集の成立について

万葉叙事

にほふ—大伴家持における—

万葉集巻十一・十二の原形についての一考察

—家持をめぐる女性たちの歌から—

人麻呂歌集非略体歌の題詞の意味するもの

万葉集の「櫛」の歌の背景—性格をめぐる—

記紀神代巻の構成と阿波系神話の行方

……守屋 俊彦

……伊丹 末雄

……市村 宏

……伊原 昭

……江野沢淑子

……渡瀬 昌忠

……町方 和夫

—国土創成神話を契機として—

古代文学における儒教精神

7号(昭和四十二年十二月二十日発行)

祈雨歌の背景—家持論への試み—

東歌が民謡であったら

天若日子神話—阿遲志貴高日子根の神をめぐる—

万葉東歌三五〇三攷

シンポジウム「古代文学史」

(講師) 賀古明・大久間喜一郎・(司会) 尾崎暢殃・渡瀬昌

忠・加藤静雄

……緒方 惟章

……針原 孝之

……中川 幸広

……渡部 和雄

……服部 且

……南保 彰